# *The White Peacock* 試論
## ――ロレンスと世紀転換期における性の言説――

石 原 浩 澄

### I．はじめに

ロレンス(D.H.Lawrence 1885-1930)の長編小説としての処女作となる*The White Peacock*(1911)に関する批評論文は*Sons and Lovers*(1913), *The Rainbow*(1915), *Women in Love*(1920)などいわゆる主要小説に比べると圧倒的に少ない。ロレンスの出発点は「自伝的作品」の*Sons and Lovers*から，という暗黙の了解のようなものがどこかしら批評界にあるのか，*The White Peacock*に注がれるまなざしは，*Sons and Lovers*や*Women in Love*，さらには*Lady Chatterley's Lover*において中心となる主題の未成熟な萌芽がすでに第一作目においても見られる，というたぐいのものが多くないだろうか。後年の作品を知っている読者による回想的(retrospective)な読みが，20世紀初頭という特定の時点で生産されたひとつのテクストに対する公平なアプローチとなりうるのか，という問いが，*The White Peacock*を論じるにあたって筆者にはあった。

とはいえこれまで*The White Peacock*が論じられてくるなかでいくつかの論点があった。網羅することはできないが，たとえば，作品の自然描写を中心に論じたもの[1]，作品中にたびたび言及される絵画に着目したもの[2]，作品の審美的要素とリアリズムの要素との関係を検証したもの[3]，フェミニズム的アプローチ[4]などである。

本稿が議論の対象とするのは*The White Peacock*におけるセクシュアリティである。その理由として，*The White Peacock*というテクストに対するこの種のアプローチが比較的すくなかったと思われることのほかに，セクシュアリティというひとつの視点を通して，ロレンス文学のテクストをその生産時の環境のなかでとらえることを試みたかったからである。

H. シンプソンはロレンスとフェミニズムについて論じるなかで，*The White Peacock*の女性を問題にした。シンプソンは，19世紀末から台頭しつつあった旧来の女性観にとらわれない，いわゆる「ニュー・ウーマン」としての一面をレティやレディ・クリスタベルのなかに認めているが，結局は，男性の性的欲求を挫折させてしまうような女性として読み，そこに「ロレンス生涯のオブセッションが萌芽状態でみられる」[5]としている。

本稿では，*The White Peacock*に見られるセクシュアリティのいくつかの形態を検証し，それらを世紀転換期のセクシュアリティにかかわる諸言説との関係において考えてみたい。具体的には，男女の性別役割分担，男らしさの理念，母親としての女性，についてである。これにより，*The White Peacock*にみられるセクシュアリティの諸相と，テクストが生産された時代のセクシュアリティにまつわる言説との交わり方の一端を考察してみたい。なお，以下本稿では，セクシュアリティを，ジェフリー・ウィークスにならって，「性的(sexual)であることの内容をさし示す抽象名詞」[6]という広い意味でとらえ，生物学的あるいは文化的性差の現象にとどまらず，それらが家族システムや社会・文化の諸側面に及ぼす影響なども含めた概念として使用していることを断わっておきたい。

### II．*The White Peacock*に見る性別役割分担

レティの求婚者で後に夫となるレズリー・テンペストの一見して明らかな特徴は，中産階級という彼の社会階級である。レティをめぐってライバル関係にあるフェリー農場のジョージ・サクストンのことを「庶民」("common fellow")[7]，「あの牛乳配達の男」("that milkman")(170)と呼ぶ彼は，ジョージに対する階級上の優越を武器にレティの相手としての

自らの適格者ぶりを示している様子もうかがえる。テニソンの詩に言及して形容されることがあることなどからも[8]，テクストの中でレズリーはヴィクトリア朝時代との関連を示唆される人物である。さらにはヴィクトリア朝中産階級の理念である，いわゆるリスペクタビリティの継承者としてもとらえられよう。[9]

教養やマナーを身に付けていることのみならず，リスペクタブルである ための価値基準は勤勉，自助，倹約，忍耐，責任感など様々だったようだが[10]，セクシュアリティにかかわる部分に限っていえば，男女の性別役割分担という考え方があった。F.M.L. トンプソンの端的な表現を借りれば「ヴィクトリア朝中産階級文化は徹底的に様々の領域に分離されていた。すなわち，一戸建の一家族用の家，家庭からの仕事の分離，そして仕事からの女性の分離である」[11]。仕事という公的領域，家庭という私的領域の分離は，ラスキンに代表されるような，男女の能力の違いというヴィクトリア朝的言説に支えられていた。[12] スーザン・ケント流に換言すれば「男性は理性，行動，攻撃性，独立，そして私利の能力を有しており，女性は別の私的領域に住んでいた。女性性（女らしさ）といういわゆる生来の特質にふさわしい領域である。感情，受動性，服従，依存そして自我の欠如，これらすべては女性の性，生殖に関する機関に由来する，と強く主張された」[13] のである。

レズリーは，炭坑会社を経営するテンペスト家に生まれ，ヨークシャーでの新しい炭坑の経営を任されるようになる(170)。さらに後には保守党の国会議員として政界にも進出する(305)。具体的な活動の様子は語られないにしろ，彼はビジネスと政治という象徴的なまでに公的領域で活躍する人物となっているのである。ひとつの場面を見てみよう。炭坑でストが始まる。生活が苦しくなった坑夫たちの冷たい視線は婚約者のレティにも向けられる。不安を感じるレティに向かってレズリーは次のように接する。

> He heard her with mild superiority, smiled, and said she did not know. Women jumped to conclusions at the first touch of feeling: men must look at a thing all round, then make a decision – nothing hasty and impetuous – careful, long-thought-out, correct decisions. Women could not be expected to understand these things, business was not for them; in fact, their mission was above business – etc., etc. (125-6)

不安にかられたレティを前にレズリーは男性がいかに物事を冷静に，注意深く，そして正しく判断するかということを説く。彼によれば，男性があくまで慎重であるのに対して，女性は衝動的で，感情にまかせて結論を急いでしまう。よってビジネスは女性の領分ではない，ということだ。「ビジネスを超えた」女性の使命，と彼が婉曲的に言うのは，家庭という私的な領域における家事，育児という女性の役割と考えて間違いなかろう。男女の能力差に基づいたレズリーの役割分担論はすでに見てきたヴィクトリア朝中産階級の「(男女）各々の領域」("separate sphere")のイデオロギーに極めて近い。

*The White Peacock* の執筆期間は1906年より1910年（出版1911年）である。テクスト中に年代は明記されていないが，諸状況から，物語は世紀の転換期から1900年代のものと考えてよいだろう。しかしヴィクトリア朝の遺産は過去のものではない。ヴィクトリア朝中産階級の規範はレズリーの中にも残っている。実際1900年の時点でも「公的領域は男性のもので，女性は私的領域に責任を持つという各々の領域という文化ドクトリンは強く残っていたのである」[14]。

補足的に述べるとすれば，1907，8年の時点でも男女の能力差という考えは特別なものではなかったようだ。ロレンスも購読していたことのある雑誌『ニュー・エイジ』の中である筆者は，話題は女性の参政権についてのものであるが，「現時点で，平均的女性は平均的男性と知性の点で同等ではない，ということをわれわれは認めるだろう」，また，「現時点で女性の思考能力は男性のそれと同程度には発達していない」[15] と述べているように，性差＝能力差という見方は当時かなり一般的であったと考えてよかろう。

セクシュアリティについて論じる上ではその時代的，地域的，そして階級的差異，特徴に留意することが重要であるということは指摘を待つまでもないが，同時に，それぞれに共通する部分も存在するだ

ろう。ジェフリー・ウィークスが示しているように，家計支持者としての男性像という点に関して言えば，それは19世紀後半には労働者階級にも浸透していた。[16] 以下では，レズリーに特徴的なヴィクトリア朝中産階級的性別役割分担のイデオロギーが，レズリーとは明らかに異なる社会階級に属する男性 —— アナブルとジョージ —— にも共通して見られることを指摘してみたい。

シリルら一行はある時森でアナブルに遭遇するが，その後彼の家を訪ね，アナブル夫人と子供たちの様子を目撃することになる。そこは父親不在の家庭である。子供たちはアナブルが望むように，まさに「野性のもの」("wild thing")の状態で，ある者は泣き叫び，ある者は床を転げ回る。彼等は，父アナブルが理想として述べるような健全な自然児，とは結び付きがたい姿でそこにいる。ひとりで何人もの子供の面倒をみなければならない母親の労働には限りがない。彼女が次のようにもらすのももっともである。

> "I canna manage 'em, I canna," said the mother mournfully. "They growin' beyont me – I dunna know what ter do wi'em. An' niver a' 'and does 'e lift ter 'elp me – no – 'e cares not a thing for me – not a thing – nöwt but makes a mock an' a sludge o' me." (134)

自分の手には負えなくなった子供を前に，妻は夫の協力のなさを嘆いている。この様子がアナブル家の常態であることは明白で，夫として父として，アナブルが家庭に目を向けることはなさそうだ。このアナブル家からの帰路，レティは「重荷を背負うのはいつも女なのね」(135)と苦々しく言う。エミリーも「彼[アナブル]がもし手伝ってくれていたら —— 彼女だって今ごろは素敵な女性－すばらしく —— になっていたでしょうに？でもあの人はぼろぼろだわ。男は獣("brutes")なのよ —— そして結婚は男たちに自由を与えるだけだわ —— 」(135)と言っている。

家庭内における女性の労働実態を理解できないのはジョージも同様である。いとこのメグと結婚してパブでの生活が始まってから１年たったジョージをシリルは久しぶりに訪ねる。日曜日ということでゆっくりくつろぎたいジョージであったが，子供たちのうるさく騒ぐ様子が気にさわる。「日曜は静かに過ごせる唯一の日なんだからメグは子供たちを静かにさせとかなきゃならないんだ」(270)と言うジョージには，妻の家庭内労働を理解できる余地などない。それは，「日曜はメグにとってもゆっくりうわさ話しができる唯一の時でもあるんだよ」(270)とジョージの不平にやわらかく反論するシリルの言葉からも理解できる。

*The White Peacock* に登場する男性たちに，ジョージ，アナブルとレズリーの間には階級という差異の方が目だっている故に，類似点を見い出すのは一見困難に思えるかもしれない。しかし，本節でみてきたように，さらには「奥さんのパーラーにいるより，この森の中にいる方がより男になれるんだ」(131)と言うアナブルや，ことごとく失敗に終わりながらも，商売や政治運動を繰り返すジョージの姿からも，三人の男性が，それぞれが男性としての存在意義を家庭の外に求めているということ，すなわち，質の違いはあれ，男女「各々の領域」というイデオロギーを共有していることは否定できないのである。

## Ⅲ．男らしさと肉体

レティのもうひとりの求婚者ジョージ・サクストンは語り手シリルの親友であり，筋骨たくましいフェリー農場の青年として登場するが，レティを獲得することはできず，さらに，アルコール中毒により肉体的にも精神的にも打ちひしがれた様相を呈していく。物語の始めから読者はジョージのたくましい健康的な肉体を強く印象づけられるように，ジョージの男性としての存在は，肉体に基礎をおいた男らしさに負うところが大きい。語り手シリルは彼について「若い農夫で，頑丈な体格で茶色の目をしており，自然なきれいな皮膚が日焼けして，ところどころしみができている」(1)と冒頭から述べている。シリルはそのようなジョージの健全な肉体に魅了される。

ジョージには，レズリーの洗練，上品さとは異なる，幾分粗野な部分で自己を主張しようとしているところが見受けられる。冒頭場面で，何の気後れを

することもなくハチを握りつぶしたり，足を痛めた飼ネコを，安楽死とはいえ，特に躊躇することもなく冷静に，溺死させる姿からは「残忍」という形容さえできる。[17] ただ，ここでは「残忍さ」や「無感覚さ」(“callousness”)は男性的(“masculine”)なものとしてとらえられていることである。フェリー農場のメス猫ミセス・ニッキーベンは罠にかかりけがをする。農場にはそのつがいのオス，ミスター・ニッキーベンがいる。負傷した相方を見ても何事もないかの様子のオス猫を目の前にして，その無感覚さにレティ，エミリーという女性たちは驚きの声をあげる。(“There was a general *feminine* outcry on *masculine* callousness”, 12，強調は筆者)　さらにネコを池に沈めた兄ジョージに対するエミリーのコメントは「無感覚さと残忍さについてはとてもいやなものがあるわ」(“There is something so loathsome about callousness and brutality”, 14)というものである。*The White Peacock* では，特にジョージとの関係において，残忍さ，無感覚さは「男性的なもの」と規定されるのである。

ジョージは男であることにこだわる。たとえば，レズリーにテニスについて尋ねられた彼は「ご婦人がたのたしなみなど習ったことがないよ」(16)と答える。上流階級のレズリーに対する揶揄もあるだろうが，ジョージにとってテニスは男のやるスポーツではない。このジョージの言葉は明確に彼のレズリーとは違う男らしさを主張している。また，レティに「結局あなたはほんの少年なのね」と言われて，「決して男の子みたい(“boyish”)だったことなどないさ」(26)とムキになって答える彼は「少年ぽさ」(“boyish”)に抵抗して，「男性的威厳」(“manly dignity”)を主張する。この威厳が傷つけられることに彼は耐えられない。次の引用の場面はジョージとシリルが森番のアナブルに遭遇し，兎の罠をめぐっていざこざの末，二人がアナブルに殴られて気絶してしまった後のことである。

> “He[Annable] – he nearly stunned me,” he [George] said.
> “The devil!” I answered.
> “I wasn't ready.”
> “No.”
> “Did he knock me down?”
> “Ay – me too.”
> He was silent for some time, sitting limply.
> . . . . .
> “Come on,” I said “let's see if we can't get indoors.”
> “No!” he said quickly “we needn't tell them – don't let them know.”
> . . . . .
> “Am I,” he said “covered with clay and stuff?”
> “Not much,” I replied, troubled by *the shame and confusion with which he spoke.*
> “Get it off,” he said, standing still to be cleaned.
> . . . . .
> “Don't – you won't say anything?” he asked as I was leaving him.
> “No.”
> “Nothing at all – Not to anybody?”
> “No.”
> “Good night.” (62-63，強調は筆者)

ジョージはアナブルに殴られたことをしきりに気にする。彼の動揺ぶりにシリルも驚いている。ジョージはこの出来事を誰にも ―― 恐らくレティに対してもっとも ―― 言わないようにシリルに何度も念をおす。健全な肉体で男らしさを誇示するジョージにとって，誰かに殴られ気絶するなど「恥と困惑」以外のなにものでもなく，決して受け入れることのできない事実なのである。

ジョージが立脚する男らしさとは，多少「残忍」でも「無感覚」でも構わない。しかし，それは女性的なものからも，少年のようなものからも区別されねばならないものであり，何にもまして強靭な肉体と，それにともなう肉体的強さに依拠しているのである。この点からも，重そうな絵を運ぶレティの「強さ」に驚くジョージの姿(27)，あるいは，肉体が称賛されるときの彼が満足げに笑う様子は，注目に値する(48, 118, 222)。

さてここで，ヴィクトリア朝後半から世紀転換期にかけて，ヴィクトリア朝中産階級的男らしさとは別に，まさに強靭な筋力，健全な肉体に依拠した男性観が存在したことを指摘しておきたい。適者生存というダーウィニズムを科学的根拠とするこの言説の背後には帝国の将来についての危機意識があった。19世紀末に南アフリカでおこったボーア戦争は，開戦当初の英国側の思惑に反して，現地ボーア

人のゲリラ戦的抵にあい，英国軍は予想外の苦戦を強いられた。こうした状況に前後して登場してきたのが，英国国民の「退化」(degeneration)という思想である。特に都市部における青年男子，すなわち帝国兵士予備軍，の身体的不健全さが注目された。[18] 「退化」思想のもとでは，胸板が薄く，病弱で体力のない「新しい都市タイプ」の男性と呼ばれる者は，帝国にとって不適格な男性と見なされた。[19] 都市部の青年の状況から，田舎の健全さが注目され，男らしさの理念と田舎，さらには粗野なもの(primitive)と男らしさの理念が結び付けられるようになったことも先学の指摘するところである。[20]

このような多分に粗野ではあるが肉体的健全さにもとづいた男らしさの言説は，*The White Peacock* では，森番アナブルにかかわる文脈によってさらに強化されることになる。シリルはジョージの場合と同じように，アナブルの「立派な体格，すばらしい活力と生命力」(147)などに魅力を感じる。森の中に自己の居場所を見い出しているアナブルは前述のように「奥さんのパーラーにいるより，この森の中にいる方がより男になれるんだ」と言い，森という場における彼の男としての自我を主張する。森という自然の中に生き，まるで文明を拒絶するかのような彼のモットーは「健全なる動物であれ」(132)である。

ロレンスの後の作品を知っている読者ならアナブルに，文明社会を拒否し，自然や本能に忠実で，生命力に満ちた，賞賛されるべき人物，未来のメラーズ像を認めることであろう。そしてこの点からも *The White Peacock* に *Sons and Lovers*, *Women in Love*, *Lady Chatterley's Lover* の原型を見い出すであろう。もちろんそのように論じることは可能であろうが，本稿が関心を寄せるのは，家庭の内外と分かたれたアナブル夫妻の役割分担，そして肉体に依拠した男らしさを誇示するアナブルの側面である。

*The White Peacock* にみられるセクシュアリティに着目した場合，前節で考察したような性別役割分担という言説に加えて，肉体に依拠した男らしさ，男性観という言説もそのテクストに入り込んでいる。そして，英国社会，さらには英帝国というマクロな視点に立ってみると，それらは共に医学や科学によって補強された，当時の支配的で，健全とみなされていた言説なのである。こうした支配的言説を支持するかのような男性 —— ジョージ，レズリー，アナブル —— についての結論を下すまえに，考えてみる必要のある，これらとは明らかに異質な人物がいる。語り手，シリルである。

語り手という役割上からもあまり積極的に物語のプロットに関わってこないために，存在感が薄く「実体がない」と評されることもある[21] シリルであるが，彼はアナブルやジョージのような「男らしさ」に固執する人物ではない。確かにジョージのたくましい肉体に魅力を感じるのも事実であるが。むしろ彼には女性的な部分が多分にある。シリルのビアゾール家には事実上父親は存在せず，彼は母と妹に取り巻かれるという女性的な環境の中にいる。このことは結果的には，伝統的家夫長的な規範としての父親像，または男性像から彼を自由にしているとの見方もできるだろう。ジョージが体現している残忍性をともなった男らしさの部分にシリルは明白な嫌悪感を示すことがある。（男らしさと残忍性との関連については前述のとおりである。）物語冒頭の場面では，土バチの羽を無理やりひろげたり，指でひねりつぶしてしまうジョージに苛立っているシリルの姿がうかがえる。別の場面では，農場で害虫としての兎を追いかけるジョージ，あるいはスポーツ感覚で兎狩りを楽しむレズリーのようにシリルは兎に飛びかかり，傷つけたりすることができない。この場面でも「男は皆獣(“brutes”)だわ」というレティのコメントからも分かるように，肉体をつかった激しい男性の行為が残忍性と結び付けられている。シリルはそのような男性像とは一線を画している。さらにはアリスがシリルをからかって女性形の“Sybil”と呼ぶのも，彼の男性としての意味を *The White Peacock* のテクストの中で相対的に弱めている。このようなシリルの存在は *The White Peacock* における男らしさの規範を相対化するのだ。さらには，ジョージ，アナブルの悲劇が語られることで彼等の男らしさは疑問に付されているとも言えるかもしれない。

シーラ・マクロードが指摘するように，ロレンスという作家は他に劣らず「男性的であることへの情

熱」[22]を持っていた作家であろう。幼いころより病弱であり，写真から判断しても頑強とはいえない体格をした彼にとって，いかに「男であるか」は重要な問題であったにちがいない。しかし男らしさの基準は，当時の支配的言説が唯一ではなかったはずだ。語り手シリルに作家ロレンスの分身的側面があるとすれば，それはこの男らしさの理念を含めたセクシュアリティの在り方に対する考えの中に見られるのではないだろうか。

シリルにはジョージの男らしさだけでは十分でないのだ。結局レティを自分のものにできないジョージに対して彼は次のように言う。

> You should have had the courage to risk yourself – you're always too careful of yourself and your own poor feelings – you never could brace yourself up to a shower-bath of contempt and hard usage, so you've saved your feelings and lost – not much, I suppose – you couldn't.
>
> (195)

シリルはジョージの，ハチや猫に対する残忍性とは違う意味での，勇気のなさを指摘する。外見上の男らしさの持つ価値に疑問を呈するようなシリルの言葉は同時に真の強さ，男らしさとは何かということを問うているのだ。さらにこの男らしさの基準は，物語も終わり近くになって次のように語られる時，一段と皮肉られ，疑問にふされているようだ。久しぶりに帰省したシリルはエミリーと会い，婚約者であるトム・レンショーを紹介される。元軍人であり，現在は父の農場で働くトムは「体格がよく，なめらかに，ほとんど上品に日焼けしている」(307)ような人物である。続けて語り手シリルは述べる。

> He was exceedingly manly: that is to say he did not dream of questioning or analysing anything. All that came his way was ready labelled nice or nasty, good or bad. He did not imagine that anything could be other than just what it appeared to be, – and with this appearance, he was quite content. (308)

たくましい肉体を持つトムだが，シリルは特に彼の物事に対する態度，つまり分析，批判をすることもなく，表に現われた現象のみで判断する，愚鈍なまでに単純な部分をとらえて「非常に男らしい」と述べているのである。男らしさの基準の相対化はここまで進んでいる。

兎に飛びかかることはできなくても，メグの家事の大変さを理解する感受性をシリルは持ち合わせている。そして語り手としてのシリルは，次節で見るように，母親ということに甘んじて自己発展の可能性を否定してしまったレティを非難する。*The White Peacock*のテクストはそのようなシリルだけを傷つけることなく残すのである。

## Ⅳ．女性と母性

本節ではレティを中心に*The White Peacock*の女性登場人物について考えてみたい。まず，シンプソンも指摘するようなレティに見られる「ニュー・ウーマン」の側面である。

レティは大学教育も受け，「現代的女性を取り扱ったものはすべて読」(74)むような女性である。芸術について語り，本稿第2節ですでに見たように，「重荷を背負うのはいつも女だわ」と，家庭内における女性の地位を嘆くレティには，伝統的男女のセクシュアリティの在り方に疑問を投げかけるようなニュー・ウーマン的，フェミニスト的側面がうかがえる。上でみたように，レズリーが彼女に男女の性別役割論を説く時も，レティは「このように扱うべきではない女性」として読者の前に提示されるのだ。

しかしながら，因習的女性像に反発するかに見えたレティは，その立場を貫くことをしない。結婚相手として，彼女はレズリーを選ぶ。ジョージとの関係が発展しなかったことについて，シリルはジョージの「勇気のなさ」を指摘していたが，レティはジョージに，レズリーとの婚約に至った状況を次のように述べている。

> I couldn't help it. ....
> I have been brought up to expect it – everybody expected it – and you're bound to do what people expect you to do – you can't help it. We can't help ourselves, we're all chess-men. (120)

農夫ジョージとは明らかに異なる階級環境の規範に従わざるを得なかったことをレティは述べているのだ。別の場面でも彼女はそうした状況から完全に自由になることのできない人間の姿について述べる。「わたしたちはいろんなことを考慮に入れないといけないのよ」(208)とジョージに対して語り，再び彼との結婚の可能性を否定する。

ロレンスがこの段階でニュー・ウーマンとしてのレティを描ききれなかったのか，あるいはヴィクトリア朝中産階級的規範から脱出できないレティの姿を描こうとしたのか，いずれにしても彼女は次第にレズリーに「服従("submitted")」(145)していく。(前に見たスーザン・ケントが紹介していた女性らしさの特徴の中にあったもののひとつが「服従("submission")」であったことが想起される。) 結婚後，家庭内ではむしろ夫を支配しているようにも見えるが，彼女がたどり着く自己実現の境地は，子供を産み育てる母親として，家庭の中に見い出されるものであった。レティは言う，「唯一価値あるのは産むことよ。・・・彼［息子］はわたしの作品なの。・・・宿泊者帳に名前と職業を書かなくてはならない時は『— 母 —』となるでしょうね。わたしの仕事が栄えるといいと思っているわ」(238)。語り手はこのようなレティを「彼女の自我を無視し，自らの可能性を空にして他人の器の中に注ぎ込み，間接的に自らの生を生きる」(284)として断罪している。レティの態度は「自我の否定」であり，「自己の発展の可能性の回避」(284)なのだ。

こうして「屋内の小さな存在」(290)となってしまうレティに対し，外でのレズリーはビジネスのみならず政治家としても活躍していく。しかしテクストの中ではレティ同様，レズリーの存在感はほとんどない。ただ際立って見えてくるのは，家庭という私的領域に君臨する女性と，政治，ビジネスという公的領域で活動する男性という，男女の役割分担が極めて明確となったテンペスト夫妻の図式なのである。

最後に*The White Peacock*における母性について若干の考察を試みてみたい。われわれはすでに母親であることに自己の存在意義を見い出すレティの姿が，自己発展の否定として語られているのを見てきた。

ここで再び森番アナブルに目を向けてみると，この母性という主題が少し別の角度から浮かび上がってくる。アナブルがシリルに自らの過去を語る場面がある。彼は以前の妻であるレディ・クリスタベルについての話をする。シンプソンも引用している一節を次にあげてみよう。

> "You don't know what it is to have the pride of a body like mine. But she wouldn't have children – no, she wouldn't – said she daren't. That was the root of the difference at first. But she cooled down; and if you don't know the pride of my body, you'd never know my humiliation. I tried to remonstrate – and she looked simply astounded at my cheek. I never got over that amazement.
>
> "She began to get souly. A poet got hold of her, and she began to affect Burne-Jones – or Waterhouse – it was Waterhouse – she was a lot like one of his women – 'Lady of Shalott', I believe. At any rate, she got souly, and I was her animal – son animal – son bœuf. I put up with that for above a year. Then I got some servant's clothes and went.
>
> (150-51)

この前後でクリスタベルは孔雀にたとえられ，女性の持つ虚栄心，高慢さをアナブルは嫌悪する。彼は，男性を一個の肉体としてではなく精神のみの虚像としか見ない女性を非難している。このような彼の非難は，ロレンスの他のテクストにも見られる女性の精神性への批判に通じるところがあり，一定そのように解することもできるが，アナブルの批判は他のところにもある。つまりクリスタベルが子供を産まない，という点である。ギリシャ彫刻にたとえられるような肉体を誇るアナブル —— 実際，近代ヨーロッパにおいてギリシャ彫刻は男らしさの表象とみなされていた[23] —— にとって男性としての満足は，妻が子供を産まなければ達せられない，という言い方を彼はしているのだ。「彼女は子供を産もうとしない」という文は，性交渉のユーフェミズムと解することも可能かもしれないが，ここでは文字どおりの意味と考えたい。アナブルという人物から見えてくるのは，ケンブリッジを出て聖職にまで就いた後に，なかば社会に背を向け，自然，本能に忠実たれ、をモットーにした男性の生命力あふれる肉体の魅力

ばかりではない。「肉体のプライド」とともに男らしさを誇示し，男性と女性の活動領域に明確な線引きをし，女性には母親であることを要求する彼は，世紀転換期のセクシュアリティの文脈においては極めて保守的なイデオロギーの持ち主なのである。

母親という存在に自己実現を求めたレティ。妻に母親たることを要求するアナブル。この母親としての女性の役割に関して，20世紀初頭の言説はその重要性を強調する傾向にあった。ジェーン・ルイスの言葉を借りよう。

> The turn of the century brought an important change in attitudes towards women's role as mothers: a strengthening ideology of motherhood, accompanied by changes in theories of sexual difference, resulted in a shift in emphasis away from the negative constraints imposed by female biology towards the importance of healthy and intelligent motherhood to an imperial nation. [24]

国民，特に青年男子の「退化」が問題にされるなか，帝国の維持，発展という大きな課題を背景に，民族の質についての優生学等の科学的言説によって，女性の母親としての重要性が積極的に強調されるのである。ハヴロック・エリスいわく，まさに"the breeding of men lies largely in the hands of women"[25]なのである。

## V．まとめにかえて

本稿では*The White Peacock*のテクストに見られるセクシュアリティの諸相に着目し，それらを世紀転換期の文脈の中でとらえることを試みてきた。そこでは性差は自然なものとされ，その差異にもとづく性別役割分担論が科学的・生物学的言説によって強化されていった。さらにマクロな視座に立つ時，それらの背後には，国民の「退化」論なども加わって，帝国の維持という大きな政治的要因もその影をちらつかせていた。

*The White Peacock*はセクシュアリティの側面にのみ限ってもこのような諸要素が交差しているテクストである。「各々の領域」を当然のごとく推奨し，男らしさを誇示し，また母親の役割を主張する人物たちが物語を織り成していく。しかし，*The White Peacock*は特定の意味に還元されることを拒む。前述のいくつかの支配的なセクシュアリティのあり様は支持されることはなく，むしろことごとく否定されているように見える。主な登場人物は実際，あるいは比喩的な意味においてであれ，悲劇的結末を迎える。ただし語り手シリルを除いて。アナブルは事故死し，ジョージはアルコールで「退化」する。レズリーは公的な成功とは裏腹に，家庭内の私的空間ではレティに仕え，支配されるような存在となる。そもそも小説の人物としては，中盤から後半にかけては無視されているに等しい。さらに母親であることに満足するレティは，自己の可能性を否定する者として非難される。また同時に，男女の役割とはいかにあるべきか，さらに男らしさとは何か，が規定されてしまうこともない。時代の支配的言説が提示され，否定されながら，まさにそのような様々なセクシュアリティのありようが試されているのが*The White Peacock*というテクストの特徴なのである。[26]

## 注

1）Kim A. Herzinger, *D.H.Lawrence in His Time* (London: Associated Univ. Presses, 1982), pp. 76-86など。

2）Nancy Kushigian, *Pictures and Fictions: Visual Modernism and the Pre-War Novels of D.H.Lawrence* (New York: Peter Lang, 1990) など。

3）Graham Holderness, *D.H.Lawrence: History, Ideology and Fiction*(London: Gill and Macmillan, 1982).

4）例えばHilary Simpson, *D.H.Lawrence and Feminism* (DeKalb, Illinois; Northern Illinios Univ. Press, 1982).

5）Simpson, p.51.

6）ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティ』（上野千鶴子監訳）（河出書房新社，1996），p.14.

7）D.H.Lawrence, *The White Peacock*(1911; Harmondsworth: Penguin Books, 1995), p.17. 以下 *The White Peacock* からの引用はこの版により，引用ページをカッコに入れ各引用の最後に記す。

8）テクストではシリルが彼のことを"stony Britisher"と呼ぶ(p.75)。また，Tony Pinkney, *D.H.Lawrence* (London: Harvester, 1990), p.13.にも指摘あり。

9）テクストの中で「リスペクタビリティ」への直接の言及としては，後半のアリスの結婚後の生活を語る中で"So all her little crackling fires were sodded down with the sods of British respectability."(315)という箇所がみられる。

10）井野瀬久美恵（編）『イギリス文化史入門』（昭和堂，1994), p. 139.
11）F.M.L.Thompson, *The Rise of Respectable Society* (London: Fontana Press, 1988), p. 197.
12）長島伸一『世紀末までの大英帝国』（法政大学出版局，1987), p. 25.
13）Susan Kingsley Kent, *Sex and Suffrage in Britain* (London: Routledge, 1987), pp. 33-34.
14）Anthea Trodd, *Women's Writing in English* (London: Longman, 1998) , p.13.
15）*The New Age* (March 21, 1908).
16）Jeffrey Weeks, *Sex, Politics and Society*(London: Longman, 1981), p.68.
17）糸多郁子は，このように残虐な行為もいとわない，たくましい肉体をもったジョージのこのような側面に彼の兵士としての特徴を確認し，それを帝国主義の文脈の中で考察した。（糸多郁子「『牧歌の国』の肉体搾取」『D.H.ロレンス研究』第7号（日本ロレンス協会，1997), pp.1-13.）
18）富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』（青土社，1995年），特にpp.197-206参照.
19）L. Pykett, *Engendering Fictions*(London: Edward Arnold, 1995), p.35.
20）David Rosen, *The Changing Fictions of Masculinity* (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1993), p. 181.
21）Pinkney, p.26.
22）Sheila MacLeod, *Lawrence's Men and Women* (London: Heinemann, 1985), p.12.
23）ジョージ・L・モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』（佐藤卓巳・佐藤八寿子訳）（柏書房，1996年），p.23.
24）Jane Lewis, *Women in England 1870-1950*(Brighton; Wheatshef Books, 1984), p.98.
25）Quoted by J. Lewis, *op.cit.*, p.98.
26）さらに多様なセクシュアリティの形態に言及するには，本稿には限界があった。たとえばシリルのホモセクシュアルの傾向など，重要な論点にも触れることができなかった。今後の課題として，稿をあらためて論じてみたい。